二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版

小説 竹内けん
挿絵 七海綾音

第一章　大店の若旦那　006
第二章　旅の空の下　052
第三章　金持ちには金持ちの苦労がある　091
第四章　お姫様の秘め事　132
第五章　お金で買えないもの　168
第六章　お姫様は濃厚な情事がお好き　205

登場人物紹介

Characters

アレステリア

ドモス王国の姫君。世間をあまり知らない、純粋な美少女。オルフィオに思いを寄せているものの、うまく伝えることができないでいる。

シルヴィア

高級娼館で一番売れっ子の娼婦。姐御肌で気っぷの良い性格。過去が謎の美女。

エウリカ

オルフィオの教育係を兼ねる美人副支配人。商売の際はクールに取引をする才女。オルフィオには愛情を持って厳しくあたる。

バーバラ

オルフィオの商隊に参加した美しき戦士。ずば抜けた剣術の使い手で冷静沈着に敵を排除する。藍色のビキニ鎧がトレードマーク。

トリエ

オルフィオの商隊のメンバー。明るく元気な美少女。社交的な性格。

レナ

オルフィオの商隊のメンバー。トリエと仲が良いが性格は正反対で、無表情に毒舌を吐く。

オルフィオ

ドモス王国で大きな力を持つ、レギンス商会の御曹司。父親から商隊をあずかり、行商に出ることに。

『第一章　大店の若旦那』より

「うふふ、元気なおちんちんでございますわね♪」
巨根ではないし、短小でもない、年相応の大きさの男根である。しかし、反り返る硬さと弾力は、世のお姉様たちの心を大いにときめかせるものらしい。
シルヴィアは、少年の生殖器をまるで宝石でも愛でるようにそっと両手で握った。
「あ……」
お姉様の手は、猛り狂う男根にはひんやりと冷たかった。
「熱いわ。すごい熱い。わたくし、火傷しそう……」
シルヴィアは手中の感触を確かめるようにニギニギと肉幹を弄んだ。それだけではない。繊手が、先端の薄皮にかかると、ゆっくりと剥きだしたのだからたまらない。
「あ、い、痛い。やめて……、やめて、ください……」
包茎の男根だったのだ。それがはじめて剥かれていく恐怖と苦痛に、オルフィオは悶絶した。その姿は、まるで処女を失う乙女のようだったろう。
「大丈夫よ、大丈夫。男の子ならだれでも通る道なんだから」
愛しげに目を細めたお姉様は、尿道穴の露出した亀頭の上に官能的な唇を持っていくと、トローと糸引く唾液を垂らした。
「はぁ……」
生暖かいヌメリに少年が驚いている間に、お姉様は唾液を潤滑油として、包皮をどんど

ん剥いていってしまった。
そして、ついには亀頭部を完全に剥きあげられてしまう。
少年は自らの変わり果てた男根をただただ見守るしかない。お姉様は、唾液の乗った指で、亀頭部に付着していた汚れを洗い清めていった。
「うっ、くっ、ん……」
痛々しいまでに腫れあがった亀頭部は物凄く敏感で、オルフィオは鈍痛さえ感じていたのに、肉棒はドックンドックンと脈打ち、先端からは先走りの液を垂れ流していた。
「まぁ、なんて綺麗なピンク色。淫水焼けしていないまっさらな童貞のおちんちんってこんなにも女心をときめかすものなのね」
麗しい妓女は、うっとりと溜息をついた。
「じつを申しますと、わたくし童貞の殿方ってはじめてですの」
シルヴィアほどの女を抱ける男は、やはり功成り名を遂げたものに限られる。その結果、それなりの年齢に達したものばかりだ。
はじめての童貞ペニスを手中に、性的に百戦錬磨であろうお姉様も、興奮の色を隠せないらしく、舌なめずりをした。
絶世の美女の顔に、こんなにも淫らな表情が浮かぶとは、オルフィオは想像したこともなかった。

「うふふ、すごい美味しそう。こんな美味しそうなおちんちんはじめて」
シルヴィアはスカートの中に両手を入れると、絹のショーツを抜き取った。
「お任せください。そのままじっとしているだけで、わたくしがすべてやって差し上げます」
ノーパンになったお姉様は、元気なおちんちんのそそり立つ少年の腰に跨った。そして、スカートをたくし上げる。
「あ……」
大胆なM字開脚をしている白い太腿が、闇夜に浮かび上がっている。その中心に、銀色の陰毛が逆巻いていた。もさっとした恥毛は、かなり濃い部類に入ると思われるが、きっちりと手入れされ、逆三角形に整えられた形は美しい。男を煽情するにたる光景だ。
その奥にふっくらとした陰唇が見える。肉の亀裂だ。その狭間から色づいた二枚の花弁が少しはみ出している。
オルフィオは、鼻息を荒くして凝視した。
「どうです。はじめてオマ〇コを見た感想は？」
「……あ、その……」
目を皿のようにしている少年に、大人の女は嗜虐的に笑いかける。
「若旦那が見ているものは、まだまだ女の門の入り口に過ぎませんわ。ほら、こうすると

……」

シルヴィアは肉裂の左右に人差し指と中指をあてがうと、ぐいっと広げてみせた。

「っ!?」

菱形に広がった鮮肉色の媚肉を見たオルフィオは息を呑む。

「あら、若旦那には少々、刺激が強すぎたかしら？」

「そ、そんなことは……」

銀色の逆巻く恥毛に縁取られた陰唇は、淫らな滴に濡れそぼっていた。その光景は生々しいが、美というものも同時に存在していた。どうしようもなく男の目を惹きつける官能的な美である。

手を伸ばせば届く位置にある絶世の美女の女性器。そこから温かい湿度ある牝臭が溢れ出している。

オルフィオとしては、もっと顔を近づけて隅々まで見たいと思うのだが、懇願する勇気がない。

百戦錬磨のお姉様としては、そんな童貞少年の願望など手に取るようにわかっているだろうに、あえて無視する。

少年の興奮をそのまま反映して、肉棒はビクンビクンと脈打ち、先走りの液体を垂れ流していた。

「あは、すごい……。ここまで歓んでもらえると女冥利に尽きるわね」
新鮮な活きのよすぎる男根を手中に、シルヴィアはたまらないといった様子で赤い唇を舐め回した。その卑猥な仕草にオルフィオは生唾を飲んだ。
なんという好色な表情をするのか。
先走りの液の溢れる肉棒の先端が、濡れそぼっている陰唇に添えられた。
「では、参りますわよ」
美妓の腰がゆっくりと落ちてきて、それに伴い肉棒がゆっくりと女肉の中に収まっていく。
「はぁぁぁぁ……っ」
敏感な亀頭に、ザラザラとした襞が絡みついてくる。少年はのたうち回りたくなるほどの快感に悶絶した。
女の腰は少しずつ少しずつ落ちてきて、最後には肉棒をしっかりと呑み込んでしまった。
「どうですか？」
騎乗位になったお姉様は、両膝を立ててみせた。その結果、二人の結合部は丸見えだ。
そのあまりの卑猥さにオルフィオは見惚れた。
曲線美に恵まれた下腹部に、太い肉棒が突き刺さっている。
（うわ、なんだ……）

はじめてのオルフィオは仰天した。

月雪華と呼ばれる美妓シルヴィア。彼女の肌は顔だろうと、太腿だろうと、下腹部だろうと、白く艶やかだ。触らせてはもらっていないが、きっとつるつるだろう。

しかるに、胎内は違った。ヌルヌルでザラザラでドロドロしている。しかも、それが動いて肉棒に絡みついてくるのだ。まるで大量のミミズでも隠しているかのようだ。

（ヌルヌルして気持ち悪い……いや、ヌルヌルして気持ちいい！）

艶やかなお姉様の肢体を見上げながら、男根に絡みついてくる妖しい肉襞。そのギャップに、女の二面性を見た気がした。

逸物が女性の中で消化されそうだ。特に入れる直前に、剥きあげられた亀頭部。そこの感覚は完全になくなってしまった。

空気に触れているときにはヒリヒリと痛かったのに、今はもうなにも感じない。否、愉悦しか感じない。

思考が真っ白に焼き切れる恍惚の中、少年はガクガクと震えた。

「あら？」

シルヴィアは驚愕に目を見開いた。つぎの瞬間、ドピュッと第一撃が噴出した。

「あん♪」

熱い迸りを子宮口に受けたシルヴィアは身を震わせた。そして、目を閉じて、少年のた

ぎりを味わった。
どびゅどびゅどびゅどびゅ……。
「あは……、すごい。こんなに勢いよくビクンビクンと脈打つなんて……。それになんて液量なの……うん♪」
思春期の少年ならではの激しい射精運動を食らって美妓が恍惚の溜息をついた。
男根をしっかりと咥え込んでいる白い下腹部が、ピクンピクンと痙攣しているさまがたまらなく淫らだ。
やがて射精が完全に終わったところで、シルヴィアは目を開いた。
二人の視線が正対する。少年が顔色を窺ってきていると察したお姉様は、嗜虐心を大いに刺激されたらしく、艶やかにしかし嬲るように笑いかける。
「早漏の殿方を三擦り半といいますけど……一擦りだけでしたわね」
挿入から暴発までの時間。初体験中は、圧倒的な快感に翻弄される長い時間に思えたのだが、終わってみるとほんの一瞬の出来事だったことに気づく。
「す、すいません……」
この美妓を満足させるには、自分の性はあまりにも未熟だ。
「謝ることはありませんわ。若旦那のお年ならすぐに再開できますからね」
シルヴィアは薄紫色のドレスの肩口に両手をあてがうと、そのままズルリと下ろした。

いきなり巨大な生乳がその全容をあらわにした。どうやら彼女はノーブラだったらしい。道理で、踊りのときに揺れるわけだ。

薄闇に白く覗いた乳房は、感動的なほどに大きく、そしてプルプルと震えていた。

ぽってりとした薄紅色の乳首が勃起していた。

「ほら、おっぱい好きでしょ」

淫らな女神は、少年の両手を取り、そのまま両の乳房を握らせた。

巨大な乳肉は、オルフィオの手には余った。しかし、まるで磁石でできているかのように、吸い付いた。

「や、柔らかい……」

「こうやって揉んで楽しむものですわよ」

シルヴィアの手が乳房への愛撫の方法を伝授してくれた。まるでミルクを練り固めたかのようなこの世のものとは思えない蕩けるような触感に酔いしれてしまったオルフィオは、シルヴィアが手を離しても、もはや乳房を離すことはできなかった。

夢中になって揉んでいると、白い乳房にピンク色の指の跡がつく。そのさまが、たまらなくエロティックに感じられた。

「うふふふ……」

無邪気な少年の愛撫に身を任せていたシルヴィアが前かがみとなり、繊手で少年の頭髪

を掴むと、そのまま貪るような接吻をしてきた。
柔らかい舌が入ってきて少年の舌を絡め取り、さらには温かい唾液が注ぎ込まれる。その甘露な液体を、少年はなすすべもなく飲み干した。
長い長い接吻を終えたお姉様は囁く。
「ほら、もう元気になった」
シルヴィアの胎内に収まっていた逸物が、何事もなかったかのように隆起している。
「もう一度したいの？」
「うん……」
欲情しきった顔の少年の、短いが素直な答えに、シルヴィアは大いに満足したらしい。
「あはっ、夜はまだまだ長い。朝までじっくりと楽しみましょう、うふふっ♪」
淫らで美しくかっこいいお姉様に、サディスティックな視線で見下ろされたオルフィオの背筋をゾクゾクッと悪寒が走った。
女郎蜘蛛に捕まった蝶々の心境が理解できた。
骨の髄まで食べられてしまう。いや、食べられたい。
「さぁ。最後の一滴まで搾りとってあげる♪」
シルヴィアの腰がゆっくりと動き出した。
濡れたミミズのような襞肉が肉棒に絡みつき、ぎゅっと搾られる。

オルフィオの吐き出した精液が潤滑油となって、二人の摩擦は滑らかになった。
豊かな銀髪が舞う。淫らだが美しい妓女の痴態にオルフィオは酔いしれた。
腹部が細く波うち、左右に張った腰が上下前後左右に踊るたびに、肉棒も前後左右上下に弄ばれる。
二人の結合部から溢れた液体が、少年の肉袋はもちろん肛門まで濡らした。
「さぁ、若旦那も下から突き上げてくださいな」
「くっ！　こ、こうかな……あっ」
オルフィオは素直に腰を突き上げた。自分から腰を動かす。それは受け手でいるときよりも男の本能を揺さぶる歓びがある。動かしだすと止まらない。
「あっ、あん、もっと力いっぱい、ケダモノのように動かしてくださいませ……あっ、そ、そうそれでいいの♪」
オルフィオは一生懸命に腰を上下させたが、所詮、騎乗位では主導権は女のものである。美妓の腰使いは、少年の腰使いを完全に支配した。
その変幻自在に踊る柳腰の速度が少しずつあがっていき、やがて鬼のような腰使いが始まった。
「あああああああっ！」
あまりの快感に少年は悲鳴を上げた。襞肉をグチャグチャに掻き回しながら、射精が始

まる。
ドビュドドビュドビュドビュ……。
二度目とは思えないほどの大量の精液が女の胎内に飲み込まれていく。
「あはっ♪　すごい」
淫らな女神は感嘆の声を上げたが、許してはくれなかった。白い柔肌から宝石のような汗を噴き出しながら、ゴリゴリと少年を責め続けたのだ。
「うわわわわ……」
たまらずオルフィオは情けない悲鳴を上げた。
「うふふ、まだよ、まだまだ終わりませんわよね。若旦那♪」
淫女の確認に、少年は頷いてしまった。
もう逸物は何事もなく三度立っていたからだ。
頭の中は快感を貪ることしかなかった。この淫らな美女と永遠にセックスをしていたい。
オルフィオは積極的に腰を使い、乳房を揉みしだいた。
絶世の美女に操られた少年は、圧倒的な快感の波に呑み込まれ、さまざまな体位を組んず解れつ体験する。狂ったように腰を使い、なんどもなんども射精した。

『第二章　旅の空の下』より

身体の半分以上を占めそうな長い足。その脚線美は太腿半ばまでストッキングで覆われており、ガーターベルトで止められていた。
そして、両足の付け根には黒いのショーツがあった。
ブラジャーとセットであろう、お洒落な下着だが、ブラジャーと違って、鼠蹊部が激しく濡れて変色しているのが特徴だった。
（わぁ、まるでお漏らししたみたいな濡れ方だ）
エウリカに限って失禁するはずがないから愛液だろうが、普段のまじめな顔を知っているだけに、そのだだ濡れの陰部は、少年の心を躍らせた。
ショーツを脱がしたとき、中身がどうなっているのか、大いに妄想を刺激される。
急いでショーツを奪おうとすると、そのショーツがガーターベルトの上から穿かれていることに気づく。
処女とはいえ、こういう配慮が大人の女というものなのだろう。
オルフィオがショーツの両脇に手をかけると、エウリカは脱がせやすいように腰を持ち上げてくれた。そこで一息にストッキングに包まれた細く長い足から引き抜く。
牝の匂いが一気に広がった。
濡れたショーツを脱げ捨てたオルフィオは、興奮を抑えきれず、仰向けに寝ているエウリカの細く長い足の両膝の裏に手をかけると、そのままM字開脚にした。

「あ……っ」

さすがにエウリカは、女としての羞恥から抵抗しようとしたが、結局、猛り狂っている少年の性欲にはあらがえなかった。

足の長い女性の大股開きは迫力がある。

予想通り、エウリカの股間の湿度は高かった。陰毛の先まで濡れている。しかし、陰毛の量はシルヴィアに比べるとかなり少ない。腋の下がツルツルだったことと考え合わせると、もともと体毛の薄い体質なのだろう。

遮蔽物が少ないことから秘裂を容易に見ることができた。ぷっくりと膨らんだ恥丘の下に、肉のワレメがあり、そこからは薄桃色の花弁がはみ出している。

さらに視線を下ろすと、

（あ、肛門だ。エウリカの肛門まで丸見えだ……）

菊花形に整った綺麗な肛門を見つけたことに、妙な感動を覚えた。

「ねぇ、エウリカ、ぼくオマ〇コの中、すみずみまで見たいんだけど見ていいかな？」

「妓女は見せてはくれなかったのですか？」

「うん、そんな暇なかった」

シルヴィアとのセックスは、もうただただケダモノのように腰を使い、射精を繰り返すものだった。

あれはあれで頭の中が真っ白になるほどに気持ちよかったのだが、男である以上、女体への好奇心というものがある。一度は、女唇の中身をじっくりと見てみたい。
困惑の表情をしていたエウリカだが、やがて覚悟を決めた熱い吐息をひとつついてから口を開いた。
「若旦那のお好きなようにお楽しみください。この身体は若旦那のものなんですから……」
オルフィオは女の両膝から手を離した。しかし、エウリカは足を閉じようとしなかった。羞恥に全身を痙攣させながらも、若き主人の期待に応えようと我慢している。
そこで遠慮なく、ワレメの両側に指を置くと、左右に開いた。クチュリと湿った音を立てて、内部があらわとなる。生暖かい強烈な媚臭が、少年の顔に吹き上がってきた。
「へぇ〜、こうなってたんだ」
張りのある陰唇の奥には、細かな襞に囲まれた膣穴。ポツンとした尿道口。そして、その上の突起。
「あぁ……」
秘すべき部分を、無邪気に観察されるエウリカの柔肌がピクピクピクッと痙攣した。
女には視姦される歓びというものがあるらしい。
「どんどん、どんどんお汁が溢れてくるね。これじゃとても見えないよ」
「申し訳ありません」

いかに意志の強い女とはいえ、意志の力で愛液の分泌を抑えられるものではない。逆に恥じれば恥じるほどに愛液の分泌がよくなってしまう。

女の身で若くして出世したエウリカは、気取ったところがあり、非人間じみたところがあった。

しかし、これは生々しい牝の生殖器である。

立ち上がる牝の匂いに誘われて、オルフィオは顔を下ろしていった。

「あぁ、汚のうございます」

「大丈夫だよ。エウリカのオマ〇コだもん」

エウリカの泉に舌を下ろすと、酸味が利いていてしょっぱい味がした。

(これがエウリカの味なんだ)

オルフィオは夢中になって愛液をすすり飲み、襞の隅々にまで舌を這わせた。

冷たい美貌とは裏腹な、熱い陰部だった。ヌメリの下には、プルンとした弾力に満ちた媚肉があり、しゃぶりがいがある。

「ああ……」

たまらずエウリカは官能の悲鳴を上げた。

幼いころからお目付け役であり教育係だったエウリカが、私生活とのギャップがあり、とても生々しい。

「……い、いかがしました？」
「エウリカの顔、すごいエッチだから見惚れちゃった」
エウリカは慌てて、顔を覆った。
「も、申し訳ありません」
「あ、隠さないで、エウリカのエッチな顔を見たいんだ」
それが女にとっていかに酷な命令か、オルフィオは自覚していない。無垢ゆえの残酷さだ。
（エウリカでも、ああいう顔するんだ。もっと感じさせてやりたい。そして、エッチな表情を見たい）
知的な仮面を脱ぎ捨て、発情した牝としての顔をあらわにしたお姉様を前に、牡としての本能に突き動かされた少年は、夢中になって舌を動かした。
「ああ……っ!?」
シルヴィアとの初体験のとき、主導権は完全に握られていてオルフィオはただ波に弄ばれる小船のような状態だった。
しかし、エウリカはオルフィオのためにすべてを差し出してくれており、オルフィオが主導権を握っているのだ。
少年の好奇心は留まるところを知らない。陰唇のすべてを舐め回しただけでは飽き足ら

ず、肛門にまで舌を伸ばした。
「あっ、そこは……あぁぁ⁉」
エウリカの目が動揺に見開かれる。
愛液と唾液の混じった舌先が、すぼまった皺の一本一本を堪能するかのごとく、ペロリペロリと舐めたが、特に変わった味はしなかった。舌をこじ入れてみようかとも思ったが、固く閉ざされているので断念した。
普段、沈着冷静な女性が動揺をあらわにしているさまは面白かったが、それほど感じているようにも思えなかったのだ。
もっと敏感に反応する部分を見抜いていたオルフィオの指先が、女の突起を撫でた。
「あああん……！」
才媛が開脚のまま背を反らして悲鳴を上げた。
「ねぇ、エウリカ、ここ気持ちいいの？」
「は、はい。そこはクリトリスと申しまして、女の急所でございます……はぁ、ああ……」
エウリカも生身の女である。二十代も半ばに差しかかっては、男性経験はなくとも、自慰経験はあるのだろう。
「へぇ、そうなんだ。じゃ、ここを集中して舐めるね」
無邪気に宣言した少年は、教えられた女の急所をペロペロと舐め回した。

「あ、あああ……あ……」
顔を隠すことも禁じられた才媛は、両手でシーツを鷲掴みにしながらも悶絶する。
（かわいい……）
まさかエウリカに対して「かわいい」などという感情を持とうとはオルフィオは予想していなかった。
（もっともっと感じさせて、もっともっとかわいくしたい）
怖い女というイメージのあるエウリカの顔を窺いながら、その急所を舌先でペロペロペロと舐めあげ続けた。
そのうち包皮が剥けて、真っ赤に腫れあがった肉の芽がむき出しになったが、少年はそれすらもお構いなしに舐め続けたのだ。
「ひ、ひぃ、いいいん……」
クチュクチュクチュクチュ……と卑猥な粘着質な水音と、それに負けない大きな喘ぎ声も室内に響き渡っていた。
普段は大理石のような肌をした、取り澄ました顔の気取った女なのだが、いまは見る影もない。発汗に濡れた肌は桃色に紅潮し、卑猥なまでに腰を突き出し、顔は泣き崩れている。
おそらく本人は無意識なのだろうが、開いた股間が掲げられたことで、クンニは一層や

りやすくなった。赤剥けた陰核はもちろん、膣口、さらには尿道口まで捕らえたのである。
「はははははああ……っ！」
泣き崩れ悶絶していたお姉様の腰が一層高く掲げられ、一際甲高い悲鳴の上がったあと、低い呻き声が漏れた。
「んぅっ……」
プシュッぷしゅうううううっぅぅぅ……。
エウリカが呻くと同時に、女裂から飛沫があがり、熱いゆばりがオルフィオの顔にかかった。
少年にはなにが起こったかわからず、鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしていると、エウリカが謝罪した。
「ごめんなさい。わたくしったら……」
「大丈夫だよ。ちょっと驚いたけど、女のひとも射精するんだ」
オルフィオは気づかなかったが、エウリカは少し失禁してしまったのだ。しかし、大人の女として、エウリカはそのことを告白する勇気はなかった。
「若旦那、そろそろ……」
「うん、わかった」
エウリカの言わんとしていることを察してオルフィオは、ズボンとパンツを下ろした。

じつのところ、密閉空間にいた逸物は、いつ暴発してもおかしくはないほどに猛り狂っていたのだ。
逸物は、うなりを上げるほどの勢いで外界に飛び出した。
「どお、これ？」
「ご立派です」
処女のお姉様ははじめて目の当たりにする異性の生殖器に見惚れた。
オルフィオの逸物は年相応。取り立てて巨根でも短小でもない。そして、若さゆえに臍に届かんばかりに雄大に反り返っている。
若武者が武者震いをするかのようにそそり立ち、プルプルと震えているさまは鉄をも穿(うが)ちそうな迫力である。
「入れるよ」
「はい、どうぞ。若旦那のために二十四年間守りつづけてきた処女です」
嬉しいことを言ってくれるお姉様の、大股開きでぱっくりと開いてしまっている女唇。
オルフィオは反り返っている男根に右手を添えて、蜜に塗(まみ)れてひくひくと痙攣する淫花にあてがった。
ゆっくりと挿入していく。
「くっ……」

エウリカは眉を顰めた。額からは脂汗が浮かんでいる。かなり痛そうだ。
しかし、オルフィオは止まらなかった。牡としての興奮に突き動かされ、強引に突進していく。
プチッ、プチッといった擬音が聞こえたわけではないが、生肉を強引に引き裂くような不思議な感覚に続いて、ヌルヌルとした肉の洞窟を突貫していった。
そして、根元まで深々と貫き、身を重ねてしまった。
（きつい。でも、気持ちいい。これがエウリカのオマ〇コなんだ）
男根が握りつぶされそうなほどの締まりだが、そんな中でもブツブツの膣壁の感触は伝わった。
エウリカの顔を見ると、片眼鏡の目元から一滴の涙が流れた。
「エウリカ、泣いているの？」
「嬉し涙でございます。若旦那に処女を捧げられて幸せものでございます」
エウリカってばかわいい。健気なお姉様を犯しながら、オルフィオの胸は愛しさでいっぱいになった。
シルヴィアは所詮、金で買った女にすぎない。対してエウリカは自ら身体を開いてきたのだ。
激情に貫かれたオルフィオは、あのシルヴィアが悲鳴を上げた、無茶苦茶な抽送運動を

開始した。
「うっく……っ！」
破瓜（はか）したばかりの女にとって、それは拷問に等しい苦痛だったろうが、エウリカは泣き言を一言も言わなかった。
だから、オルフィオは思いやることができなかった。ただただ自らの欲望にのみ忠実に従った。
はじめはきついだけだった肉壺も、少しずつ緩くなり、ブツブツした膣襞が肉棒を刺激する。
（あぁ、気持ちいい……。やっぱり、私生活からかっこいい女っていうのは、オマ〇コの具合もいいものなんだ）
シルヴィアのヤワヤワとした締め付けとはまるで違う。まるでカズノコでも隠しているかのような肉壺の中、肉棒がどんどん大きくなっていく。
昼間、エウリカの顔を見ながら、蜜壺の具合を想像したことがあったが、想像とは別物だ。それもいいほうに裏切られた。
「エウリカ、もうイきそう……」
「はい、どうぞ、わたくしの中で思いきりお果てください、ひっ！」
見え始めた快楽の門を突破すべく、オルフィオは夢中になって腰を使い出した。

シルヴィアが伝授した若さに任せたただ激しいだけの突貫である。結果は、美妓のときと同じで長持ちはしなかった。

どびゅっ！

「エウリカ――――っ！」

絶叫とともに、処女肉の中で肉棒が爆発した。

ドクンドクンドクンドクン……。

「あぁ、あああ……凄い、入ってきます。凄い勢いで、いっぱい……」

胎内で起こる愛しい主人の射精。それを受ける女は、脂汗を浮かべて蒼白ではあったが、幸せそうだった。

血塗れのシーツを見て、オルフィオが絶句したのは翌朝のことである。

脳髄が焼ききれるほどの興奮を感じたオルフィオは、淫獣となって上下の女性器を夢中になって舐めしゃぶった。

クチュピチャクチュピチャ、ジュルジュル……。

「ひぃう……あっ、あっ、あっ、あふっ……」

甲高い悲鳴を上げたのはアレステリアだ。彼女は両の乳首をトリエ、レナにしゃぶり立てられながら、オルフィオの強烈なクンニを受けたのだ。小さな身体がビクンビクンと痙攣した。

アレステリアの淫らな声に気をよくしたオルフィオは、彼女の陰部を集中的に舐めしゃぶった。ひとつには上になっているアレステリアの陰部のほうが舐めやすかったのだ。

オルフィオは、お姫様の小さな姫肉を口に含むとチューッと吸った。

「ひゃふっ」

小さな悲鳴と同時に、手足がビクビクビクと痙攣し、淫裂の狭間からドビュッと大量の愛液が噴出した。もろに顔にかかったオルフィオはネトネトである。手で軽く拭き、舌で舐めた。

「あはっ、またお姫様ったらイっちゃった♪」

トリエの声に続いて、レナも感嘆した。

「うふふ、お姫様ったら完全に牝の顔になっちゃったね」

オルフィオが顔を上げると、アレステリアは大きく胸で息をし、かわいらしい珊瑚色の唇はだらしなく開いて、涎が垂れている。しかし、碧色の瞳だけは餓えたようにオルフィオを見つめていた。

「ごくんっ」

オルフィオの喉が大きく鳴った。

背後から抱き締めているシルヴィアの手が、すっと降りてきて、アレステリアの蜜だらけの陰部にそっと触れた。

「ここ、疼いてしかたないでしょ」

「……」

アレステリアは力なく頷いた。

「うふふ、もう通じちゃった女にとって、いくら濃厚な愛撫でイかされても、それだけじゃ満足できないのよね」

シルヴィアの言わんとしていること、アレステリアの思いを察して、オルフィオは叫んだ。

「エウリカ、バーバラ、お願いやめて、ぼくアレステリアとつながりたいんだ」

オルフィオの願いはすぐさま叶えられ、エウリカのアナル舐めとバーバラのフェラチオは終わった。

アレステリアを、シルヴィアとレナとトリエの手中から奪いとったオルフィオは、その場で四つん這いにさせると、円やかな白く輝く尻肉を抱えて左右に割った。
「くん……」
アレステリアが不安げに身悶えた。オルフィオがなにをしようとしているかは、さすがに察しているようである。
オルフィオは、本日、すでに二度射精しているとは傍目にはとても信じられないほどに猛り狂っている逸物を、女の秘門にあてがった。
そこはすでにオルフィオの唾液と、シルヴィアの愛液、そして当然、アレステリア自身が吐き出した愛液によってドロドロ、白いストッキングの内側も濡れ光っている。その姿は失禁したようにしか見えない。
「い、いくよ……」
「うっ、うん……」
興奮に上擦った声のオルフィオとは裏腹に、アレステリアの声は心細そうだった。
前回の破瓜の痛みを思い出しているのだろう。それと察したオルフィオは、ゆっくりと慎重に押し込んでいった。
ザラザラとした襞の充実した膣肉が、男根に絡みついてくる。まるで膣内に小さな妖精が多数潜んでいるかのような蠢動である。

とはいえ、ここまで入念な前戯をされたからだろう。ヌレヌレの膣襞は、執拗に纏わりつきながらも、男根をスムーズに呑み込んでいった。最後にはずぽんっとすべて呑み込んでしまった。

「あっ、痛く……ない」

前回の股を切り裂くような破瓜の記憶も生々しいアレステリアは、戸惑った顔をする。

姫君の身体から緊張が解けると、オルフィオの自制心は限界にきた。少年は一気に荒腰を使い出した。

「あっ……、あっ……あっ、はっ……ああっ……っ」

肉棒で突きまくられる歓びというものを自覚したアレステリアは、獣のように四つん這いになりながら、気持ちよさそうな喘ぎ声を張り上げる。

「あっ——ああっ、ああっ……っ、イ……イ……ク、ああっ……っ！」

アレステリアの身体がピクピクピクと震えた。肉棒に絡みつく無数の襞がキュキュッと締まり、愛液がシャワーのように浴びせられたことからもわかった。

お姫様は、男根によってはじめてイったのだ。

（よし、これからもっとアレステリアをイかせてイかせて、イかせまくろう）

自らは果てずに女だけを果てさせたことに満足したオルフィオが、さらに荒腰を続ける。

犯しまくられている姫君に、シルヴィアが優しく質問した。

「どう、オルフィオくんとのセックスって気持ちいいの？」
「はぁ、す、凄く……気持ちいい……あっ、あっ、あっ、あっ……」
とろんと蕩けきってしまっているお姫様に、シルヴィアは肩を竦めた。
「おちんちんの気持ちよさを知ってこそ、一人前の女でございます。これから姫様にはめくるめく官能の世界が待っています」
バーバラは愛しげに目を細める。
「それにしても若旦那ったら、ほんと女体を扱うのがお上手になりましたわね」
エウリカが、呆れ顔で感心する。
ふいにオルフィオの右手がバーバラの股間を、左手がエウリカの股間を捕らえた。そして、首を伸ばして、シルヴィアの胸に顔を埋める。
「あらん、もしかして、わたしたちを同時にイかせちゃおうとか考えているのかな？」
オルフィオの頭を胸に抱きながら、その意図を察したシルヴィアが質問した。
「……ダメですか？」
「うふふ、ほんとドスケベね。まぁ、いいわよ。できるものならやってごらんなさい」
許可をもらったオルフィオは、夢中で腰を動かしアレステリアを犯しながら、両腕でバーバラとエウリカの陰部を弄びながら、唇ではシルヴィアの乳首を吸った。
「若旦那、あたしたちは？」

トリエの抗議の声を聞いて、オルフィオは叫んだ。
「トリエとレナは待っていて、二人とも必ずあとでイかせるから……んっぷ」
シルヴィアに後頭部を強く抱き締められた。
「ほら、そういう約束している暇があったら、一生懸命わたしの乳首を吸いなさい。乳首だけでイくのってけっこう大変なんだから♪」
大きな乳房に顔を埋めてオルフィオは呼吸困難になったが、四人の女性を同時にイかせようとしたものの意地として、指と腰と舌を動かし続けた。
オルフィオにとって、エウリカとバーバラは勝手知ったる女体だ。旅の間になんどもなんども抱いただけにイかせるコツのようなものはわかっている。
シルヴィアもプロとして、乳首だけの愛撫でイこうと自ら高めているのが窺える。
問題はアレステリアだ。彼女がイクのにあわせて三人の女はイってくれるに違いない。
オルフィオは細心の注意を払って、細かな襞の充実した姫肉をえぐりまくった。
「ひや、あふ、あん、もう、許して、いや……」
四つん這いで犯されているアレステリアは、背後でどのようなことが行われているのかまったく自覚しておらず、ただただ自らに与えられる快感を貪っていた。
女たちをイかせようと頑張っていたオルフィオだが、逆に追い詰められていった。そのことは男根を食らっている女が一番よくわかる。

「いや、すご、すごい……大きい……どんどん大きくなる！」
アレステリアは目を白黒させている。
「あら、若旦那、もう限界なの？　……あん」
シルヴィアの揶揄に、まだまだという意味を込めて乳首を強く吸ってやった。
とはいえ、全身を女肉に包まれながらオルフィオは三度目の頂点に達しようとしていた。
熱くて濡れた細かな襞肉が、男根の隅々まで捕らえて離さない。
「あっ……あっあっ……はっ、い……い、あああああああっ！」
アレステリアが絶頂した。その結果、ザラザラの媚肉が蠢動しつつ、逸物を吸ってくる。
まるでタコツボの中に牡棒を入れているかのようだ。
（うっ、アレステリアのオマ〇コって、どんどん具合がよくなってくる……）
お姫様の名器に翻弄されつつ、左右の二の腕に感じるエウリカとバーバラの乳房、掌に感じる陰部のヌメリ、さらに顔面にシルヴィアの乳房の柔らかさ。まるで身体そのものが女性の胎内で揉まれているかのようだった。
恍惚の中、襞のうねる女性器の収縮に向けて、男根を解放する。
どびゅどびゅどびゅどびゅどびゅ……。
熱い液体が、女の胎内深くを打ち据え続ける。
女たちの愛撫がどんなに練達していても決して味わえない、膣内射精の快感。これを味

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/